

的な問い合わせや議論が、本書の問題提起をきっかけに、さらに深まるところを望みたい。折一論は不毛だが、同じ現象を違う角度から見つめる視座を持つことは、私たちの歴史研究を、それだけ豊かなものにしてくれるはずである。(二〇一四年二月刊、四六版、三三一頁、二七〇〇円+税、社会評論社)

大澤広嗣

## 戦時下の日本仏教と南方地域

小島 敬裕

本書は、戦時下において「南方」または「南洋」と呼ばれた東南アジアを進攻するため、政府・軍部によって動員された日本人僧侶や仏教学者による活動の実態を、広汎な一次資料から明らかにしたものである。まず各章の内容を簡単に紹介しておきたい。

第一部「戦時体制と仏教界・仏教学者」では、僧侶や仏教学者を「南方」に送り出す主体となった各宗派の連合組織や学術団体の活動に焦点をあてる。

第一章では、一九四一年に成立した財團法人大日本仏教会の活動について扱われる。宗派横断組織である大日本仏教会は、文部省からの監督を受けて各宗派への指導を徹底し、南方対策

としては、宗教工作に関する講習会を開催したり、関連資料を出版するなどの活動を行った。一九四四年にはさらに宗教界全体の連合組織である財團法人大日本戦時宗教報国会に再編され、拠出金の集約、戦争遂行の宣伝などに宗教者が動員された。第二章では、国際仏教協会の調査研究との変容について論じられる。国際仏教協会は、一九三三年の成立当初、おもにヨーロッパとの学術交流を目的とした超宗派の団体だったが、四〇年内閣直属の情報局の指導・監督を受けるようになると、大東亜共栄圏の建設に協力し、アジアの政府要人や仏教団体との連携を図った。また南方仏陀祭(ウエーサク祭)を開催したり、上座仏教僧として日本人初の出家者である秋興然を顕彰するなどの活動を行った。

第三章では、財團法人仏教團協会の工作要員養成について扱われる。一九四一年に国際仏教協会が設立した巴利文化学院は、超宗派の立場から宗教宣撫工作に従事する要員の育成を目的とした。翌年には財團法人仏教團協会に移管され、さらに四三年にはアジア全体に派遣する人材を育成するため秋山道場と改称された。超宗派の工作要員養成が可能になったのは、特定宗派に属さない政治家や元軍人らが運営の中枢を担っていたためである。

第二章「南方進攻と仏教学者の関与」では、僧籍を持つ研究者たちが、調査活動や宣撫工作を通じて、どのように戦争に関与したかという問題について検討される。

第一章では、僧籍を持つ二名の研究者を一九四一年に派遣した興亜仏教協会(後に大日本仏教会へ吸収)のインドシナ調査について分析する。彼らは、仏教寺院はもとよりキリスト教やカオダイ教に至るまで宗教事情を調査し、報告書にまとめて陸軍参謀本部に提出した。またフランス極東学院長セデスの日本招聘も計画していた。これらの調査は、学術的な観察の形態をとりつつ、日本が進出する際の足がかりを得ようとするものだった。

第二章では、ビルマ進攻作戦の際に陸軍が行った仏教宣撫工作について紹介される。班員の選抜には大日本仏教会が関与し、戒律研究のためタイに留学していた真言宗僧侶の上田天瑞(高野山大学教授)も軍の要請によって参加した。ビルマでは僧侶に対する信頼が篤いため、班員はビルマ僧と似た色の法衣を纏つて戦争の意義を説明した。上田は、日本語学校校長を務めた後、研究者としての念願を叶えるため、ビルマで上座仏教僧としての出家を経験している。

第三章では、日本軍のマラヤ占領後に宗教調査を行った渡辺謙雄について触れる。曹洞宗の僧侶である渡辺は、駒澤大學教授を辞職した後の一九四二年に、陸軍司政官としてシンガポールへ赴任し、軍政下の治安維持と民心の把握を目的として、中華系住民の仏教、マレー系住民のイスラーム、インド系住民のヒンドゥー教など諸宗教や民族に関する調査を行った。この実地調査経験は、渡辺が宗教全体に対する認識を深める契機と

なり、戦後の新宗教教団研究へと発展した。

第四章では、大日本仏教会を通じて一九四三年にインドシナへ派遣された仏教留学生が取り上げられる。この事業は、上述した興亜仏教協会の派遣者による報告を踏まえて行われ、僧籍を持つ若い研究者をハノイのフランス極東学院や寺院に滞在させて、仏教の仏教文化に関する研究および仏教徒の親善を図ることを目的としていた。しかし留学生は、戦時下の要請によつて日本語教育や日本軍の通訳に携わるようになり、研究は完遂されなかった。

最後の第三部「日本仏教の対南文化進出」では、南方地域に進出した仏教界の文化工作について述べられる。

第一章では、真言宗の僧侶として出家した真如親王の奉賛活動について検討する。真如親王(高岳親王)は、平安時代に求法のため天竺へ向かう途中、羅越國で虎に襲われて死去したとされ、時局の要請からアジア民族の結束の象徴として注目された。真如親王奉賛会が一九四二年に発足すると、羅越國をシンガポールとする主張に基づき、真言宗を中心に関民一体となって大仏像などの建造を目指したが、敗戦により実現しなかった。

第二章では、ジャワの仏教遺跡ボロブドゥールに対する日本の軍政当局と仏教界の関与について述べられる。ジャワ軍政監部の関係者らが遺跡の基壇の発掘や調査研究を行う一方、仏教に基づく遺跡として関心を示した。遺跡に注目が集まった背

景には、西洋の旧宗主国に代わって日本の佛教徒が調査と保護を行なうべきとの認識があつたが、顯著な成果が出ないまま敗戦を迎えた。

第三章では、一九四二年の日泰文化協定に基づき、バンコクで建設が計画された日泰文化会館のうち佛教館に着目する。日泰の文化交流によって佛教徒の連帯を図ることが目的だったが、同じ「佛教」とは言え戒律の相違が大きく、僧侶ではない佛教学者の派遣・交換などが事業として計画された。建設経費は、大東亜省が補助金を支出したほか、大日本佛教会が各府県佛教会や各宗派から寄附金を募ったが、敗戦によって構想は実現しなかった。

以上、内容の紹介を終えたところで、東南アジア研究者としての立場から、まず本書の優れた点についてあげておきたい。日本軍政期の東南アジアと日本の関係を扱った研究は、決して珍しいものではない。しかし筆者によれば、「日本の佛教界による現地への関与について、横断的に着目した研究は、今まで皆無であった」(四頁)。戦後七〇年を過ぎて「これまで言及が回避されてきた東南アジアに対する日本佛教の関わりについて、ようやく実証的に研究することができる時期に来た」(四頁)のだと言う。貴重な一次資料の蒐集と、丹念な記述により、それを初めて成し遂げた筆者に対し、まずは敬意を表したい。

日本佛教の海外布教については、台湾や朝鮮における活動が

を行つたが(第II部第一章)、ベトナムの諸宗教に関する情報が、陸軍でどのように活用されたのかについては明らかでない。筆者は、報告書の表紙に記された日付の直前に、日本軍の南部仮印進駐が交戦を経ずして実施されたことから、「何らかの形で軍事行動に応用されたと考えられる」(一六一頁)と推測するが、報告書の構成にも軍事行動と関連のありそうな項目は見当たらない。

②進攻初期の宣撫工作は、ビルマで行われたが(第II部第二章)、重要な役割を果たした上田天瑞は帰國後、以下のように述べている。「ビルマ佛教が日本佛教とあまりにも対照的なもの驚くのである。ビルマ佛教を日本大乗佛教によって改革するとか、指導するとか言ふことは、教理論を闘はせることによっては現在の所絶対不可能である」(一〇四頁)。

③占領後における佛教を通じた文化工作は、まず馬來軍政監部調査部の事例(第II部第三章)があげられるが、二三九頁で筆者は、「多数の報告書が作成されたが、軍政の施策に反映されなかつた」と述べた後、調査部の一員による以下の証言を引用している。

〔調査の成果が軍政の施策に〕正直言つて全然現われてないです。それが我々の調査だった。学術的な調査になつてしまつた。(中略) 南方総軍の中では調査部の地位というの浮き上つた地位にありました。従つて我々が調査やつ

知られているが、南方での活動とは性格を異にする筆者は指摘する。まず東アジアでは各宗派による布教が行われたのに対し、南方では「現地の宗教事情を尊重する方針と共に、中国占領地で佛教各宗派が現地で競合した教訓から、原則として各宗派の新規進出は制限された」(三六九頁)。また東アジアの植民地では、「日本人移住者への布教活動や社会事業を主たる目的として、寺院や布教所などの施設を置いた」(三六九頁)のに対して、寺院や布教所などを施設を置いた(三七〇頁)。以降は、日本人の移住者を対象としなかつた。さらに漢訳仏典を使う東アジアの大乗佛教と、パーリ語經典を使用する南方の上座佛教の相違は大きく、日本佛教の布教活動を行つたところで現地に受け容れられることは明らかだ。そこで、日本佛教が南方の佛教より優位にあることを標榜しつつも、佛教に関する文化と学術から関与することを目指した(三七〇頁)。以上の指摘は、本書による大きな学術的貢献であろう。

しかし同時に、以下のようないかで、筆者は、政府・軍部の方針のもと派遣された僧侶や仏教学者が、①武力進攻前に情報収集などの謀略活動に関わり、②進攻当初における宣撫工作に従事して、③占領後には佛教を通じた文化工作活動の実施に協力するなど、随所で国策に関わっていた(四頁)とする。「関わっていた」ことは事実であろうが、その活動は政府や軍部にとってどれほど有意義なものだったのだろうか。

### ①武力進攻前の情報収集は、興亞佛教協会がインドシナ調査

第三部で述べられた真如親王奉讃施設、日泰文化会館のいずれも完成を見なかつたし、ボロブドゥール遺跡の保護修復も、見るべき成果はあげられなかつた。結局、本書にあげられてゐる事業は、ほとんどが「絵に描いた餅」に終わつたと言つても過言ではない。

しかしこのことは、本書の価値を下げるものではない。むしろ軍政が統治に佛教を利用しようと試みつつも、それがほとんど失敗に終わったという事実にこそ注目すべきではないだろうか。失敗の背景分析から、大乗佛教と上座佛教の相違といつた一言では片付けられない両者の特質が浮かび上がるかもしれない。

そのためには、「南方」の人びとが日本人によるさまざまなかい、これはむしろ東南アジア研究者に与えられた課題である。本書を出版点として、この課題を追究することは、おそらく東南アジアの佛教理解に新たな視点をもたらすのみならず、日本佛教に対する認識を深めることにもつながるだろう。そうした

研究の可能性を拓いたという意味でも、本書は高く評価しうる。

(一〇一五年二月刊、A5版、三九〇頁、四八〇〇円+税 法藏館)

ほしい。

## 永岡崇氏の書評へのリプライ

塙田穂高

私事から始めるのは恥ずかしいことだが、学部のころから親しんできた『近代仏教』誌に拙著『宗教と政治の転轍点——保守合同と政教一致の宗教社会学』（花伝社、一〇一五年）の書評が載ると知り、光榮に思った。まずは、評者の永岡崇氏と編集委員会のみなさまに感謝申し上げたい。だが、二三号掲載のそれを読み、「失望」したことも正直に述べなければならない。

筆者が依拠する議論や研究史などを読み飛ばし、他方で書いてもいないことを読み込むなどといった「誤説」に基づく評がそのまま本誌読者に「誤解」されることは、対象書の著者として看過できるものではない。よって、リプライの掲載を願い出た次第である。

拙著についての学術的な書評としては、すでに對馬路人・櫻井義秀・高橋典史・星野健一の各氏らから提出されている。<sup>〔1〕</sup>對馬の書評には筆者のリプライも付されており、これには永岡の指摘にすでに答えているような部分も多々あるので、参照して

永岡の書評の半分以上が、この「正統」「異端」概念とその用法の妥当性に集中している。よって、リプライもまずはその「〇異端」「H異端」概念を、戦後宗教ナショナリズムの関係概念として有効再活用し、前者の軸を「正統」に引きつけられる「〇異端」、後者の軸を「H異端」ゆえの独自進出」として描いた（いずれもカッコ付き）、ということになろう。

そもそも「分析概念」とは、対象をうまく分析し、事例の特性をわかりやすくするためのものであり、それだけを切り離して是非が問えるのかは疑問である。永岡の議論の大部分は、「正統」「異端」と呼ぶのが適切なのか（傍点筆者、以下同）という問いに終始しており、「正統」「〇異端」「H異端」の関係論としてみた場合に拙著の事例群の位置づけがわかりやすくなっているかどうかという観点は稀薄である。

それでもなお永岡の批判内容に沿ってみると、「神社本庁は戦後ナショナリズムの「正統」か」「戦後の「正統」はリベラル派の護憲ナショナリズムではないか」などと集約できる「正統」についての問い合わせがまず目立つ。いずれも拙著での議論に対しても、筋違ひのものである。

拙著で論じているのは、永岡の引用箇所の同じ行にあるように、あくまで「戦後日本における宗教ナショナリズム」（拙著四九頁）である。信教の自由・平和主義・象徴天皇制という戦後の大定アリーナにおいて、宗教が政治に関わる際にどのようなナショナリズムを梃子とするのか、そのパターンを見るというのが主眼である。よって、主張していないことに疑問を投げかけられており、「神社本庁・神道政治連盟の掲げる主張が政府によって公然と支持されているとはいえない」（書評一九五頁）などの指摘も空回りしている。

関連して、永岡の書評で疑問なのは、筆者が研究史を踏まえ、慎重に議論を限定していることを無視する点である。例えば、永岡自身が引用している第2章の註二三（拙著六九頁）では先行する中野毅の研究に触れ、前述の戦後の大定アリーナを前提としつつも、拙著では焦点化する局面が異なることを断つている。戦前・戦後の連續性についても、村上重良や島薗進の国家神道論の戦後に続く問題意識<sup>〔4〕</sup>を批判的に継承したものと明記している（拙著三三二三四頁）。にもかかわらず、そうして発せられる「戦前と戦後の國家体制は別では」「戦後の「正統」は護

憲ナショナリズムでは」などの問い合わせには、これまでの研究史の流れと拙著が新たに焦点化している部分とをあらためて確認してほしいと応答するしかなく、議論を前に進めるものとは言いたい。

さらに、永岡の「正統」「異端」をめぐる批判が実にアドホックな投げかけにすぎないことは、本人の発言が示している。「近代の宗教政策のなかで、教派神道のことを考えるとわりと教えや実践には振れ幅がある。微妙な異端性もはらんだ神道の世界」というのが一定程度許容されていた。異端性があるということは批判性もあるわけで、そうした可能性をはらんでいたと言えると思いますが、しかし現実には振れ幅や一定程度の異端性があることによってむしろ活力やダイナミズムが生まれ、そのエネルギーが国家に吸収されて総力戦体制になだれ込んでいくという部分もあったと思います。それを戦後から現代のなかで考えるならば、日本会議のような保守共同運動に、それぞの教団が一定の独自性を持ちながらも落ち着いてしまう」

このように永岡自身が神道における異端性（カッコもつけずに）が「吸收され」「落ち着く」という問題を、戦前の総力戦体制と戦後の「保守合同運動」（筆者の語法だ）の連續性のもとに論じている。永岡は「正統」の語を用いてはいないが、「正統なしに異端ではなく、その逆もない」（書評一九四頁）はずだ。また、その議論は「無用なレッテル貼りによる可能性を否定で